

【佳作】

自分の心で判断すること

小山ひらり（埼玉県 埼玉県立浦和第一女子高等学校 2年生）

「主文、被告人を死刑に処する——。」テレビのニュースや新聞などの報道を見ていけば、誰もが必ず一度は目にしたり耳にしたことがある言葉だろう。多くの命が奪われるような凄惨な殺人事件が発生し、容疑者が逮捕されれば、マスメディアはこぞって犯行の動機や容疑者の生い立ちを調査し報道するだろう。そして私達はそれをただ鵜呑みにしてしまいがちだ。私自身も、容疑者に不利な状況だけを見て、その人物が犯人だと思い込んでしまうことが多かった。

「イノセント・デイズ」内にも、私と同じように容疑者の顔だけを一瞥し「なんか、いかにもだよな」と口にする女性が登場する。容姿で犯罪者であるか否かが決定されるなどという決まりは、勿論どこにもない。しかしながら私達は、他人の内面を省みず外面のうわべだけを見て、内面をも判断した気になってしまうことがままある。テレビの例を見ると、女優やモデルなどその器量を売りして活躍する女性達は、たとえ知性や品格が多少欠けていたとしても世間から可愛いともてはやされ、それに比べて醜い女芸人などはブスだといじられ嘲笑的にされる。職種による違いもあるだろうが、あんまりだと目を覆いたくなる程ひどい

のまである。また、昨今インターネットの危険性が叫ばれているのも、顔を見て他人を判断できないと、どんな人物であるか判断できないという不安を前提としたものだろう。このように、私達は他人の外見、特に顔から受ける印象でその人物を判断してしまいがちである。私達が自然と行っているこのような判別行為が誰かを傷つけ、取り返しのつかない悲劇に陥ることさえある。「イノセント・デイズ」は私達にその一例を示している。凶悪な殺人事件の被告人・田中幸乃が、実際は無実でありながら死刑を宣告され、友人弁護士らの抵抗も虚しく処刑されてしまうのだ。本来、彼女の心を推し量ることは誰にもできない。しかし、日常の一つとして、事件が起きればマスメディアは犯行の詳細を暴こうと躍起になり、それを見た私達は限られた情報から思いのままに自分勝手な推測をし、彼女を断罪した気になる。時が経てば彼女の存在も薄らぐというのに、まるで日常にスパイスを加えるかのように彼女を縛りあげる。それが彼女を傷つけることに目を背けるふりをして。

こうした思い込みはテレビや雑誌で見る他人にのみ作用されるのではない。良かれと思ってしまうことが人知れず他人を傷つけることもある。作中のある人物は、幼なじみの彼女を有罪と決めつけ、彼女を守りたい自己中心的正義感から罪を悔い改めるよう迫る。また、他の人物は、過去に彼女を貶めた負い目から彼女を救おうと奔走する。二人とも彼等なりに彼女のための思い自主的に動く好青年達である。傍から見れば、彼女を助け出す救済者、さながらヒーローのように映るかもしれない。しかし、本当に彼女は彼等へ救済を求めているのだろうか。本当に彼等は彼女の気持ちを理解しようとしたことがあったのだろうか。独りよがりな決めつけていた部分は無かったと言えるのだろうか。ここに、彼

女の気持ちを顕著に表している言葉がある。

「もし本当に私を必要としてくれる人がいるんだとしたら、もうその人に見捨てられるのが恐いんです」(45ページ)

彼女は幼少期から多くの信頼してきた人々に裏切られ、見捨てられた。彼女は、大切な人に再び裏切られることを恐れるあまり誰に対しても信頼したり心を許したりすることができなくなってしまうのだらう。それならば、やはり彼女を助けようとした彼等の行動は独りよがりな部分を含んでいる。誰かを思いやりした行為も、それが真にその人に望まれているかは本人にしか分からぬ。自分の感情や考えの押しつけは時として残酷なものであり、不快な感情をもたらすことが多い。相手の気持ちをただ推し量るだけでは、相手を理解するには不十分なのだ。

どんな物事にも必ず隠された裏側があり、その裏側にもさらに秘められた裏側があるという。私達が報道や他人からの見聞で触れることができるのは、誰かの悪意や思い込みで歪められているかもしれない表側の一部分にすぎないのだ。その部分のみを脳内で切り取り、あたかもそれが真実であるかのように錯覚することは、誰かを傷つけ悲劇を招く。「イノセント・デイズ」の読書体験は、私にそう教えてくれた。情報社会に生きる私達は、安易に周囲に同調するのではなく、確立した自分の意見を持つように努めなければならぬ。そうした一人一人の努力が彼女のように傷つけられる人間を無くし、私達自身をも助けることにつながるのかもしれない。

書名…イノセント・デイズ

著者…早見 和真